

研究分野のキーワード：体育科教育，教師発達，省察フレーム

研究紹介

体育の授業を教師の仕事と考えずアートと考えると，授業はクリエイティブな態度で創案され自由度はかなり高いものです。教師の仕事の中で最も工夫を凝らし，個性を発揮することができる場合は「授業」です。実際，恐るべき工夫をする先生の驚愕の授業を見ます。そんな授業は子どもたちが楽しんでいることはもとより，先生自身も楽しそうです。

体育の目標は「体育を好きになること」なのですが，目標と逆行し，体育の授業を受ける度に「体育が嫌いになる」人もいます。体育が好きになるのも嫌いになるのも，「一応ひとまず，すべては教師のせい」と考え，教師を変えて体育を変えるという立場をとることにしています。

全ての仕事に職能発達があるとすれば，体育の教師も始めから教師なのではなく「教師になっていく」と考えられます。一般的に職能は，経験年数に比例して若年・中堅・熟練などの発達段階がイメージされます。「経験量」が増えると「経験知」が蓄積されるという考えです。そうなるためには経験から学ぶことが必要です。経験から学ぶ人は自らを反省の対象にします。

体育授業に関する教師の反省の弁の多くは「巧く行ったか行かなかったか」を子どもの活動状況から判断しています。活動状況は授業に対する子どもの取組の状況ですので，概ねそれは積極性に関するものです。この省察フレームをフォーカスすれば子ども個人に向かい，ワイドになれば集団を見ることになります。

現在，そんなフレームを意図的に変えることができないものかという課題に取り組んでいます。子どもの積極性などの活動状況とは別に，教師自身にフレームを作ってもらおうという取組です。自分でフレームを考えることは面倒くさいので，どこを見たらいいか教えてくれないかと思うのですが，教えてそこばかり見る人になってしまうと教師の個性は消えていきます。自分で考えるフレームは，当を得ていない可能性もありますが，誰もが見ない点を発見する可能性もあり，何よりも自分で考えることの自由を保障します。

一見，難しいと思うのですが，私たちは日々何かに志向性が及び，自分のフレームで何でも見えています。それを即時的に評価し体内で感じ，快不快を覚えていることでしょうか。そんなフレームを意図的に変えるには質問を使います。質問は人の考えを一定の枠に収め，尋ねられた瞬間，そのことを考えるようになります。自分で意図的にフレームをコントロールするには自分に尋ね，その答えに更に尋ねていくとフレームはコロコロと変わります。

体育は息抜き，体育はただ汗を流す時間，体育もちゃんと考えているんですねとは学生の体育に対するコメント。息抜きでも，ただ汗を流すでも結構です。ちゃんと考えることさえできれば，学ぶ対象にも研究対象にもなりますので。要はそのフレームを形成できるかどうか重要であり，かつ人と違うフレームをもてれば個性は発揮され，独創的であればあるほど，そのジャンルは発展していくのです。